

「フィギュール」について(1)

末松, 壽

<https://doi.org/10.15017/2559321>

出版情報 : 文學研究. 95, pp.121-145, 1998-03-30. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

「フィギュール」について(1)

末 松 壽

序 論

デュマルセ (César Chesneau, sieur du Marsais, 1676-1756) の担当になる記事 «Figure» は、1756年、『百科全書』第六巻に収録された。冒頭の方野指定は「修辞学、論理学、文法学の用語」となっている。また末尾の「署名」は F¹⁾。グランベールのいわゆる「哲学者にして深遠な文法学者」²⁾ は、その前いくつかの宗教論争ないし思想の自由に関する文書を著していたのだが、1722年からはその死に至るまで、主として大小様々な言語論の著述を公にする³⁾。その中で、我々にとって特記すべきは次の論考である。

——『ラテン語習得のための理性的方法の提示』(1722年)⁴⁾

——7巻本として構想された『文法の真の原理』の序章(1729年)⁵⁾

——『文法の真の原理』のうち、1730年に日の目をみた第7巻、『転義論』⁶⁾

——『百科全書』の第一巻(1751)から第七巻(1757)にかけての «A» から «Grammairien» におよぶ149篇の項目記事⁷⁾

最後の項目群のなかの一つが問題の «Figure» である⁸⁾。

現代におけるデュマルセの回帰、そしてより一般的に修辞学の復興が、文学理論、言語理論、特殊的に言語学や哲学における修辞学の主題化、さらには記号論の構築という1960年代以後の画期的な人文科学の展開のなかで、フランス・

フォルマリズム⁹⁾を代表するいわば「バルト学派」の文学理論家たち、「詩学者」ジェラルド・ジュネット¹⁰⁾それにツヴェタン・トドロフらの旺盛な活動をつうじて果たされたことは周知のとおりである。けれども、彼ら前衛の注目したのがまず『転義論』に限られていたこともまたある意味で奇妙な事実であった。というのもそれ以前ギョームやとりわけチョムスキーはデュマルセの文法分析の方に注目していたからである¹¹⁾。そこから二三の問題があらわれる。まず、『転義論』はこの「哲学者たる文法学者」の思想を真に代表するものであるかどうか。第二に、ジュネットやトドロフ、それにリクール、ペレルマンらは、転義 (trope) こそは、18世紀初めにおける修辞学の、更にはより狭く文彩 (figures) の専横的でなければ少なくとも中心的主題であったと解釈し、——ジュネットのいわゆる「縮小された修辞学」¹²⁾——、そしてこれが西欧におけるこの学科の第二のそして最後の「危機」の開始であるという¹³⁾。この展望は、1730年当時のこの学の全体的な状況の認識を十分にふまえて提出されたものなのか。つまり『転義論』は同時代の修辞学一般を理論的にも実践的にも真に代表するものであったのか。これが出版から30年を経て1757年以後になって初めて再版をみるのは何を意味するのか¹⁴⁾。第三の疑問は、いわゆる「危機」の終わりにかかわる。本書の公刊から一世紀、文彩の分析と体系が継承され是正されてフォンタニエによって完成された暁に¹⁵⁾、フランス修辞学は消滅するというのが例えば (すでに歴史家であった) トドロフの見解であるが¹⁶⁾、そしてそれは二つの問を提起する。一つは消滅の時期および事情の確定、もう一つは (仮にここで一世紀後を想定すれば) 1830年頃のこの学の在り方はどうであったか、という二つの問題である。これは『象徴の理論』がそうするように、フォンタニエの著作およびそれに先立つ二三のテキストの検討だけで明確にできることなのか……¹⁷⁾

修辞学の復権が人文諸科学において新たな地平をひらく一つのインパクトであった事実を考えると、我々はその一つの契機となった上記学者たちの貢献を評価することに格であってはなるまい。近年みられる古代や古典時代の修辞

学書の再版——そもそも我々が冒頭であげたデュマルセの著述の最近の出版¹⁸⁾——また修辞学の歴史をあつかう研究の出現を見ると、彼らのはたした役割が決定的に重要であったことは明らかである。けれども30年の距離は、我々に、彼らの示した道を再びたどりつつ、道そのものを凝視しそこで開かれた展望を見直すことを可能にしている。そしてそれはすでに始まっている¹⁹⁾。

一つにはそのような再検討のための準備として「Figure」項目を読みなおす必要があるだろう。これは、より詳しい著作と見なされた『転義論』への参考文献として、あるいは後世のフォンタニエとの関連で読まれたにすぎない。しかし我々の見るところでは、それは実際には参考資料とか論争的にするには惜しく、それ自体で吟味を受けるに足る十分の豊かさ（そして難解さ）をもっていると思われる。この項目を一読するならば、そもそも「Figure」の概念が修辞的文彩のそれを溢れ出る内包と外延をもっていること、言い換えれば転義の現象は辺境ではないにしてもせいぜい一つの領域にすぎないことが分かるだろう。それゆえ、フィギュールとは文彩である、ところで文彩は修辞学の対象である、ゆえに「フィギュール」項目は修辞学の論考である、という三段論法はその大前提において成立しないのである。それに項目そのものの分野指定を忘れてはならない。比較の効力を確信しながらも筆者は、他方ではそれが当初から関心を方向づけることによって読みの視野を狭くし、テキストの射程を相対化しあるいは制限してしまう危険を知っている。テキストの豊かさは問題の項目をまず精密に読むことによるのみ明らかになるだろう。

それゆえ筆者はこの記事の検討をつうじて、フィギュール現象を前にした書き手デュマルセの反応に注目し、処理の仕方つまり書き方を記述し、そしてそこに描かれるフィギュールの組織について考察しようと思う。『転義論』をふくめて、先に列挙した著者の一連の文章はここでは参考資料の価値しかもたないであろう。

I. フィギュールの煩瑣さ

項目の外観

デュマルセの記事を読む者がまず気づくのは、いわゆる «Figures» なるものがきわめて多く、それがざっと70におよぶ現象を意味する事実である。従ってそれらを区分し、整理し、互いに関連づけ、統括することが必要になる。網羅的リストの作成と分類である¹⁾。各々が孤立しているならば、すべて散逸する恐れがある。実際デュマルセはそれらを整理することを試みる。しかし今度はその分類のしめす組織が単純ではなく煩瑣をきわめることがわかる。この印象は、テキストを分節するために導入されるメタテキスト、とりわけ種々の番号システムが全く方法性を欠くという著者の無頓着さによって助長される。まず全体の構成や枠組みをしめす番号はない。いくつかの不手際もある。例えば、呼応すべき2°以下を欠く1° (VPG, p. 605)、先行すべきIを欠くII (609)、1°に続くII、III... (610、611) などである。項目のもう一つの全体的な特徴としてペダンティズムを挙げなければなるまい。名称、定義、説明、そして用例のいずれにも、古代から近代にいたる有名・無名の人名とともにギリシア語や特にラテン語の語句が現れるのである。

現代の読者を真先に驚かし辟易させずにはおかないこれら二つの特徴は、歴史上にあらわれた幾つかの学問や思想を連想させる。たとえば、古代ヒンズー教の詩学²⁾、スコラ哲学——これまたラテン語による哲学であった——、そして18世紀ヨーロッパにおける博物学などである。博物学が自然界のあらゆる動・植・鉱物を網羅し記述しつくすことをめざす以上、そこでも概念の網(分類や組織)が、したがって用語の体系が不可欠になることは論をまたない。その意味では博物学とフィギュールの学とはその記述対象の相違——事物に関する言葉の体系/言葉に関する言葉の体系——にもかかわらず、それをこえて親近性をもつということが出来る。この事実は、諸分野を横断する同時代の知の「考古学的分析」をめざした構造主義の観点からして注目すべき現象であった。実

際、

トゥルヌフォール、リンネ、ビュフォンの博物誌がそれ以外のものに関連をもつとすれば、それは生物学、キュヴィエの比較解剖学、ダーウィンの進化論ではなく、ボゼの一般文法学に、ロウ、ヴェロン・ド・フォルボネあるいはテュルゴに見られるような貨幣の分析になのである³⁾、

というフーコーの指摘において、ボゼの位置にその先任者を（特殊的にそのフィギュールの記述を）代入することができるだろう。

なぜならば、ここで仮に『転義論』を例にとるとしても、何よりも前にそれが文法学の一部分であったことを忘れてはならない。著書を説明しながらデュマルセはこう書いている。

さらに文法学者は、ある語が固有の意味でとられているか比喩的な意味でとられているかを問うことができる。（…）これら様々の意味で同一の語はとられ得るのだが、（…）これら様々の意味を知るとは、我々の思惟の記号としての語を真に理解するために必要なのであるから、この点に関する論考は文法学に従属すると私は考えた。（…）それゆえ私は上述の6つの部分に、同一の語がとられ得る様々の意味に関する特別の論考をつけ加えた。それがこの文法書の最後、第7部である⁴⁾。

実際には序文しか書いていない大著をすでに刊行したかの如く語るこの奇妙なテキストにおいて⁵⁾、二度にわたって表明される «[les] différents sens dans lesquels on peut prendre un même mot» は文字どおり『転義論』の副題の一部に他ならないこと、著書の本体はもっと簡単に同じ命題を主張すること⁶⁾、デュマルセのペンの至るところに現れるトポスともいうべき固有の意味/比喩的意味の区別は、同書第一章第6、7節 (articles) (pp.73-84) の主題であるほか、後に見るように «Figure» においても一つの論点になること、を注記しておく。要するにこれは、膨大な著作の構想のうちで現代いわゆる「意味論」を構成すべき部分なのであった。

ただ、18世紀の博物誌が伝聞 (le oui-dire) を排除し、可視的形態の観察から体系を構築していくのに対して⁷⁾、フィギュールの学知にとっては、すでにペダンティズムの指摘から予想されるように、文献による[・]伝承を排除することは決してできない。フィギュールの知識とはその由来からして伝承的な集積物なのである。

それがラテン語と不可分の関連をもつという事実は、ヨーロッパ共通の学問言語がその地位を個別言語、民衆語あるいは諸国語に奪われるのとほぼ時期を一にしてこれまた廃れるという事情と相関している。図像学における寓意表象がラテン語と運命をともにして消滅するという指摘があるが⁸⁾、寓意 (Allégorie) とはまた奇しくも一つのフィギュールの名 (I-3-2)⁹⁾ でもある。これは偶然の符号ではなく、知の変貌の象徴的な事例に他ならない。フィギュールの思想は古代から受け継がれた遺産であって、それ故に近代以後ペダンティズムの様相を帯びざるを得なかったのである。時期の確定の問題はあり、消滅時の修辞学のいわゆる「縮減」についても予断は許さないが、ともかく少なくともフィギュールにしろあるいは限定された意味での文彩にしろ、一方でその観察が微細になりあるいは整備されて、いわば「完成された」ことは否定できない。他方フィギュールの体系がある時期を境にして西欧における認識の地平から一旦は消滅したことも否定できない。少なくともその壮大な術語体系は生命をうしなう。これは通時的な観点にとって興味ある問題である。レトリックの歴史が書かれなければならなかった所以である。

ディレンマ

ところでフィギュールの煩瑣さとは、同じ学知の伝統の中にいなかった読者、あるいは伝統の途絶えた所にいる読者にとってのみの印象ではない。それは実は、古今東西の人類の学術と芸芸を収集し、記述し、分析し、批評し、整理して同時代にひろめ後世に伝えるという使命を自らに科した本¹⁰⁾ に記事を書く人にとっても厄介な事情であった。そのことは書き手その人が繰り返す言葉に

よって窺い知ることができる。

もちろん、命名による事象の切りとりは精神の第一の活動であることをデュマルセは承知している。「figure」なる語を定義しそれが意味する現象を説明する件で、名前というものの由来や人間における名づけの習慣的实践——しかもそれは物的な物 (êtres réels) のみならず形而上的なもの (êtres métaphysiques)、つまり「我々の精神のもつ様々な見方」におよぶこと——を述べたあと、彼は命名の効用を説いている。曰く、

これらの名前はそれが意味する形而上的对象をいわば感感的にすることに役立ち、我々が思惟を整理し精密にする上で助けとなる。(VPG, 606)

だが、それにもかかわらずデュマルセは続くパラグラフでは早速に名称の氾濫を嘆くのである。

文法学者と修辞学者たちが、どれほど多くの観察をし、しがってまたこれらフィギュールの名称を増大させたかは信じ難い。これら様々な名称の詳細を記憶につめこむのは無駄だと私には思われる。(pp. 606-607)

更に «Tropes» (I-3) についても、

語の最初の意味からの逸脱は多くの仕方ではなされる。修辞学者たちはそれぞれに特別の名前をつけた。それらのうちには記憶につめこむのが無駄な多くの名前があって、これこそまさに名は実に関係ないということのできる機会の一つである。(618)

そもそも、1730年の著書のタイトルとなったこの語そのものが「皆からは理解されていないこと」を彼は知っていた。1757年の『転義論』第二版「序文」は、これをある民の名だと思いこんだ男のことを伝えている¹¹⁾。特定のフィギュールについても学者たちに対する明白な批判を読むことができる。「Enallage」

(I-2-10) などについては「文法学者たち」は「理由もなく」「あらゆる原理に反するいわゆるフィギュール」に名前をつけた (616-617)、「*Répétition*」(I-4) の多様な種類に関しても「修辞学者たちは (…) 無駄なことだが、わざわざ個別の名称をあたえた」(619) といった次第である。こうしてデュマルセは伝承を構成する名称の氾濫をなげき、伝承者たちにおける命名への偏愛、執着を非難するのである。

名前の、従って言語の危険性について著者は他のところでもこう指摘している。

人々は罪の罰として無知の状態に委ねられている一方で、知ることを願っている。そして名前を想像しただけで目的に達したと思いきむ。名称というものは彼らの好奇心をひきとめるけれども、実際には知識をあたえはしないのに¹²⁾。

有益と無駄、必要と不必要。このディレンマを解決しなければならない。フィギュールについて書くということは、これらの相反する判断の実践的な総合を要請せずにはおかない。一方では、記事が恣意的なものとならないように現象を記述しつくさねばならない。他方ではしかし先行者たちの轍を踏まないために、現象を整理し単純化し、名称を節約しなければならない。その意図は果たして実現できるのか。デュマルセにおける意図と実践の拮抗を観察しよう。

名称の誘惑

名称の詳細を「記憶につめこむ」(*charger la mémoire*) のは無駄だという第一の引用には次の文がつづく。

しかし、様々の種類のフィギュールを知り、各々の種類に属するもっともよく用いられるフィギュールの名前は知らなければならない。(607)

«Tropes» の説明においても「よく聞かれる主な転義は...」に始まる名称の列挙がみえる (618-619)。使用の頻度を基準にした「主なもの」(principaux) とそうでないものの経験的な識別、そして前者のみを与えて後者は省くという方針を推測することができる。

けれどもこの方針が問題をはらむことは容易にわかる。まず、頻度というものは相対的であるから、それを基準とする限り、「主なもの」をどの程度に限るかという決定は恣意的にならざるを得ないだろう。第二に、「についてよく聞かれる」とは学者たちが「について語り」「名称をあたえた」ということに他ならない。とすれば基準とは学の伝統ということにならざるを得ない。ところで我々がすでに知っているように、デュマルセは伝統の内にありながら必ずしも伝統をそのまま是認しないのである。それゆえこの方針は、自己をいつわって伝統に従うかもしくは伝統を無視して自己を主張するか、という二律背反の前にデュマルセを絶えずおくことになる。

彼の解決はしかしそのいずれでもない。「Anastrophe」(I-2-4-1) を導入するテキストを見よう。

他にいくつかのフィギュールがあるが、それを知るのは注解者たちに頻繁にその名称がみられるという理由でのみ有用であるにすぎない。(613)

事柄においてではない。それ自体においては有用ではないにもかかわらず、伝統による取扱いつまり一定の評価がある故にその認識は用をなすのである。「Antiptose」(I-2-9) および «Enallage» (I-2-10) にかかわるより明示的なテキスト、

二つの別のフィギュールがあるが、これはフィギュールの名に値しない。けれども、注解者や文法学者たちがしばしばこれに言及しているが故に、説明しなければならぬとおもう。(615)

こうして「フィギュール」は、古典フィロロジや文法学の伝承のなかで自律し、その名でよぶ価値はないと判断する人をも巻きこみながら自己を保存する。ただしデュマルセの独創性とは、事柄自体の認識は無用であるという自己の判断をそれでも書きこまずにはおかないことである。伝承を批判しながらこれに従う。そのために著者は学者としての自らの判断に完全に従うことはできない。「フィギュールの名に値しない」ものまで紹介せざるをえない。例は他にも見いだすことができる。「*Répétition*」(I-4)の種類の「個別名」をしめすのは「無駄」としながら「*Climax*」と「*Synonymie*」を説明し、更には駄洒落にすぎぬという『人間ざらい』の与える評価とともに「*Paranomasie*」を、そして「*Similiter cadens*」以下4つを列挙する(620-621)。とりわけ2連の名称列挙は、デュマルセにおけるディレンマを証明してあまりある。一は「*Tropes*」(I-3)のそれである。著者は、まず語と事柄を説明し、その種類の存在を予告し、あの否定的評価を表明し、例文をあげて「転義」に代わる「比喩的表現」(*expression figurée*)という概念での総括を示唆する一方、「*Métaphore*」以下「主なもの」10種類の名称を、簡単な説明や時には用例まで引用しながら列挙するのである(618-619)。それらは当然いわゆる「無駄な大部分」には属さないであろう。

ただ、与えられるのが無限定にいわば水平に伸びるリストであるという事実は見逃すわけにいかない。まず列挙の順序に意味はあるのか。それにこれらを垂直に括り統括するでもあろう上位区分や逆にこれらが統括する下位区分、つまり階層組織はあり得ないのか。もちろん答えはない。列挙のあとで著者はこう書くにとどめる。

各々の個別の転義名は、この『辞書』の該当する箇所に十分の説明とともに見ることができ。またそれらの起源、使用法、濫用については項目TROPEへの参照を願う。(619)

『百科全書』読者への参照指示である。リストはしたがって索引機能をもつことがわかる。そのことはしかし、個別の記述が、ここでの列挙に欠けている体系性を補充するというものではない。なお «Trope» については、デュマルセ自身がこれを書くことはなかった。これは後に後継者ボゼが1765年の第十七巻 (698b-703b, 署名B.E.R.M.) において担当することになる。

名称列挙のもう一つの顕著な例は «Figures de pensées ou de discours» (II) の記述である。例によってこの用語そのもののラテン語とギリシア語を与え、事柄を説明し、«Antithèse» (II-1) およびその他二つの例をとってそれが特有の思惟の形 (forme particulière) によって互いに区別される——もちろん伝統はこれらの各々に命名した——のみならず、「単なる文ないし表現」(フィギュール・ゼロ) からも区別されることを述べた後、デュマルセは名称の紹介にはいる。

ここで我々は、その各々についてはそれぞれの箇所でも語ることにして、これらフィギュールの主なものの名前を集めることしかできない。我々はすでに «Antithèse» «Apostrophe» «Prosopopée» に言及した。(622)

再び「主なもの」(les principales) である。そしてごく簡単な説明や稀には例文をともなって、«Exclamation» (II-4) に始まる19におよぶフィギュールの行列がつづく (622-623)。もっともこの紹介の仕方は、著者によるある実践的な区別を示唆するように思われる。すなわち、冒頭で説明される3つを先頭に、つづいてリストに入る19、最後に「その他いくつか」(quelques autres) ——名指すに値しないもの——である。列挙は「... «Admiration» «Sentences」、その他いくつかの見分けやすいもの」(623) で閉じられているからである。重要性を基準にした三大グループの設定である。

この可能な識別にはしかし細部について納得しにくい点もあろう。例えば、現代の読者なら説明も例文もない «Description des personnes, du lieu, du

temps» (II-6) の扱いが、たとえば «Apostrophe» (II-2) や «Prosopopée» に比べて過小に評価されていると感じるかもしれない。このことは、(ホメロスの先例があるにもかかわらず) 古典修辞学が、フィリップ・アモンが示したように¹³⁾、一般にこれに与えた相対的に低い位置によって説明することができる。他方しかし、「列挙」(II-9) の重要性はデュマルセの書く行為そのものが証明しているのに対して、「頓呼法」は「崇高な文体においてしか用いられない」ことを『転義論』も指摘していたのである¹⁴⁾。また (II-20) «Hyperbole» (623) はあるのに、なぜ «Litote» はないのか……。さらに体系の観点からして «Tropes» の場合と同じ疑問が残る。水平のパラディグムを分節したり階梯に組織するでもあろう論理的な区分がないことである。じっさい著者は「名前を拾うこと」しかなかったのである。この言明には『百科全書』読者への参照指示が伴っているが、リストの作成は索引機能を提供するという理由だけで説明することができるだろうか。我々には遺産の重み、制度の束縛、要するに名称の誘惑とでも呼ぶべきものがここに働いていると思われる。古来の名前がある以上それを無視することはできないのである。『転義論』におけるデュマルセの理論の混乱を批判し、ボゼ、フォンタニエにおける定義と実践との乖離を指摘するトドロフは、フィギュールとは「結局フィギュールの名で呼ばれるところのものに他ならないかのようだ」と極論する¹⁵⁾。

以上、煩瑣なフィギュールの集積に対する作家の反応である。では「フィギュール」の著者は、名称の氾濫がしめす事象の複雑さにたいして、どのような解決を試みるであろうか。これについて考えるのが次の課題である。

II. デュマルセの処理法

デュマルセの提案する処理には様々の面がある。以下それをいくつかに分けて考察しよう。

単純化

まず沈黙がある。すでに指摘したように「Litote」への言及はない¹⁾。「Figures de pensées」の内に「Réticence」(II-14)は位置を占めているのに「Prétérition」の名前は見あたらない²⁾。同様に「Antithèse」(II-1)はあるのに「Oxymoron」はない³⁾。また「Hypallage」⁴⁾も現れない。誰でもその不在に気づくこれらの名称は「主なもの」の範疇に入らないが故に省略された——方針の実行——にせよ、大部分はギリシア語を語源とした、従ってたとえフランス語形をもつとしてもその意味が他の語からの類推(ソシュールのいわゆる「相対的動機づけ」⁵⁾)を拒む専門用語であるという理由で除去された——脱ペダンティズム——にせよ、意図的に落とされたと考えられることもできよう。

他方しかし、上記の理由によって正当化されない脱落もある。例えば「隠喩」(I-3-1)とともに最も頻繁な使用をみるフィギュールの一つであり、転義には属さないけれどもそれとのコントラスト、似て非なる性質のために「隠喩」の説明に際して言及されることの多い「直喩」⁶⁾は見えないのである。実際『転義論』の著者も、キケロやクインティリアーナスの跡をたどってこう書いていた。

隠喩と直喩の間には次の差異がある。直喩においては或るものを他のものと比較する(l'on compare)ということを知らせる用語が用いられる。例えば怒っている人について「あれはライオンのようだ」というならば、これは直喩である。しかしただ「あれはライオンだ」と言うときには比較(comparaison)は精神の内にはかない。字句にはない。これが隠喩である⁷⁾。

フィギュール総論ともいうべき記事におけるこの脱落は説明することが困難である。それは余りにも陳腐で「見分けるのが容易である」というのか。沈黙が数を減少させ、記憶の負担を軽くすることに役立つのは事実だとしても、重要なものを拾い上げなければ記述の完璧さは損なわれるだろう。ではこれは重要ではないというのか。それとも術語としての「Comparaison」と常用語として

の「比較」との判別はしばしば困難であるほどこのフィギュールのいわば輪郭、フィギュール性 (figurativité) が薄いというのか⁸⁾。あるいは単なる失念が原因なのか。我々には説明のつかない問題である。

特定のいわゆるフィギュールを「文法上の誤り」として除去する方策もある。これは理由を明示するという理由で黙殺よりは積極的な整理であるといえる。三つの例がある。まず周知の事柄からとりあげれば、構文のフィギュールに入る «Pléonasmе» (I-2-2)。デュマルセはいう、

意味 (sens) に関しては不必要なこれらの語が、言説により多くの優美さ、明白さあるいはより多くの力とか活力を与えるときには、それらは (...) 承認されるフィギュールとなる。しかし、贅語がこれらの利点をまったくもたらさないとき、それは文法上の欠陥あるいは少なくとも粗雑さであって、これは避けねばならない。(611)

ここで問題なのは、記号としての語の意味作用 (signification) もしくは現代いわゆる記号作用 (signifiante) ではなく、一定数の語の纏まりが構成する文の意味 (sens) である。デュマルセはこれら二つのレベルを明確に区別している⁹⁾。さらにここには伝統修辞学による言説の三つの機能の識別の思想が簡略化された形で前提されている。すなわち「教え」(伝達) / 「快樂」(感動) / 「説得」(折伏)の段階区分である¹⁰⁾。効果——広義の「意味」——をもつ贅語法(後二者)は文彩として認めるが、そうでなければ欠陥 (défaut) ないし粗雑さ (négligence) にすぎないのである。

このような有効/無効の識別は «Hyperbate» に属する «Anacholuton» (I-2-4-5) についても見られる。これは、たとえば tel を欠く quel のように「後続するものが先行するものに結合されていず」(614)、文法的対応関係が文中に実現されていない場合であるが、デュマルセは「これはフィギュールというよりはむしろ欠陥であるとエラスムスという」¹¹⁾と述べて、自らの判断をユマニストに代弁させている。

別の箇所では著者自身が除去の労をとる。「Antiptose」および「Enallage」(I-2-9, 10) の場合である。前者は、「*Urbs quam statuo vestra est*」でなく、「*Urbem quam...*」(Virgile, *Æn.*, I, v.573) のように、文法的に要求される格の代わりに「別の格」が用いられた場合であるが、同様の例 (Caton, Térence) を挙げたあと、著者は注解者たちやとりわけ文法学者デポテール (Jean Despautère, v. 1460-1520)¹²⁾ に皮肉をあびせる。曰く、ラテン語を学ぶ若者たちは格の使用を間違えても、これらの権威をもって弁解できるだろうと。デポテールはこのいわゆるフィギュールを「あらゆる格について」認めているからである。ポール・ロワイヤルの『ラテン語教本』(1650) を参照しながら、

しかし、とデュマルセは書く。誰にも明らかなことではないか。もしこれらの交代が古代人たちに恣意的に許されていたとしたら、文法のあらゆる規則が無用になったことだろう。(616)

言語現象を記述し理拠を解く文法 (grammaire raisonnée) は規範文法と無縁ではない¹³⁾、と言っても十分ではない。それは誤用をも文法的に説明しなければならぬのである。デュマルセは続ける。

それゆえ、理性をもちいる類比主義の文法学者たちは antiptose を捨て、人々が与える事例をもっと理性的に説明するのである。(616)

この類比にもとづく説明は後で見ることにして、ここではデュマルセが「Antiptose」なる名称を設けること、つまりそのフィギュールとしての承認を拒んでいることだけを確認しておこう。それは要するに文法規則への違反にすぎず、殊更に「フィギュール」の名を冠するに値しないのである。

「Enallage」についても著者は、すでに一部を引用した箇所だが、これら

「慣用によって容認された特有語法 (idiotismes)」は、

あらゆる原理に反するいわゆるフィギュールにたよる代わりに、模倣と類比によって共通の構文の形に還元することができる (617)、

とのべて、同じ処理を提言する。そして問題の「フィギュール」を敢えて誤法とみなすことのできる理由を更に追加している。

それに写字生の不注意とか、またホメーロスについていわれたように時には眠り込むこともある作家自身の怠慢によって様々の難解さがもたらされる。それらは、そこにはない規則性を見いだそうとするよりはむしろ間違い (fautes) と認めるほうがよいだろう。先入観は、あってほしいと望む具合に物事を見るけれども、理性はありのままにそれを見るのである。(617-618)

ホラティウスによるホメーロスの「居眠り」への名高い言及を思い出させながら、デュマルセは『転義論』においてとは違ってここでは近代派にふさわしい議論を援用しているのである¹⁴⁾。

以上が、整理・削減の形をとって現れる命名システムの単純化である。次に、古い稀な用語の取り扱いを観察しよう。

脱ペダンティズム

上記の処理がフィギュールの名も実も減らすことであつたのに対して、ここでは事象としてのフィギュールは維持しつつただその名称を近代化することが問題になる。顕著な例が二つ見出される。

まず «Interrogation» がある。奇妙なことにこれは、いずれも「思惟のフィギュール」のリストで次のような説明とともに二度にわたって現れる。

II-7: それは自ら問い自ら答えることに存する (à s'interroger soi-même et à se répondre)。 (622)

II-15: それは、後でより力強く答えるきっかけとなるような何らかの問いを発すること存する (à faire quelques demandes)。 (623)

一見して相似た定義は微妙な一点で異なっている。すなわち前者が自問自答であるのに対して、後者はいわば他問自答である。この事実から、ドゥエ＝スブランは二つのフィギュールをそこに認め、前者は「Deliberatio」に、後者は「Interrogatio」に対応すると解説している¹⁵⁾。しかしこの解釈にはいささかの疑問ものこる。事柄自体の区別の実際上の困難——言説における自問/他問は二つのフィギュールを認めるに十分な差異を構成するのか。(この我々の問いは自問なのか他問なのか)——は別にして、何よりも、異なるフィギュールならば何故に著者は同一の用語をあてたのであろうか。前者には、示差的でありかつ不都合のない「Délibération」が用いられて然るべきではなかったか¹⁶⁾。ともあれ、自問自答は古くは「Soliloque」とよばれたことを思い出そう。『百科全書』はその名の項目冒頭でこう述べている。

ソリロックとは誰かが自分自身にあてて行うところの推論や言説である。「独白」参照。

ソリロックとは固有の意味では人が自分自身に問うた質問に対する解答の形での言説である、とパピアスは言う¹⁷⁾。

デュマルセはしかし、ラテン語が透けてみえるのみならず神秘神学においてとりわけ用いられるようになっていたこの術語を紹介しない。(同様に「monologue」はこの時代には演劇の術語であったことが上記項目によってわかる)。マークされた語の回避と他方では(ドゥエ＝スブランの解釈を承認するなら)用語の置き換えによる近代化を語ることができるだろう。けれども一語が二つの事象を意味する限りにおいて、これは巧みな解決であるとはいえない。

もう一つの、そして今度は疑問の余地のない処理が項目の末尾に現れる。「ラテン語で書いた文法学者たちが多用した」文法学の術語としてのある「フィ

「フィギュール」について (1)

ギュール」を廃止する提案である。

それは語に起こる偶有であって、単純であるか複合的であるかということに存する。例えば *res* は単純なフィギュールであり *publica* も同様であるが、*respublica* は複合的なフィギュールの語である。(626)

デポテールを再び引用し攻撃したのち、デュマルセはこう結論する。

しかし今日我々は次のように言えば十分である。単純な語があり複合語がある、と。そして *figure* なる語には我々が語ってきた他の意味を残すのである。(626)

術語の置き換えによる近代化であるが、それは同時に、「フィギュール」の多義性を僅かでも減らす限りで単純化につらなる。

最後に、もしかしたら脱ペダンティズムの意図を推測することができる例を挙げておこう。「*Métaplasme*」なる用語の扱いがそれである。「語のフィギュール」のうち「*Figures de diction*」(I-1) に関する2頁にわたる記述を締めくくるパラグラフを見よう。

語の素材 (*le matériel*) における多様な異変は一般的名称で *métaplasme* と呼ばれる。*μεταπλάσσω*、*transformo* から来る *μεταπλασμός*、*transformatio* である。(609)

「措辞のフィギュール」の末尾に、そして続く「構文のフィギュール」との隙間にさり気なく古い語を置くこの振舞は、あたかもこの総称が伝統的用語であるがゆえに言及せざるを得ないけれども、それまでに述べた事柄は「*Figures de diction*」として把握すれば済むという判断を暗示しているように見える¹⁸⁾。

著者の提案する他の手法、「体系化」「脱フィギュール」「大衆化」については本稿(2)で検討する。

デュマルセ「フィギュール」の体系表

I. Fig. de mots	1. Fig. de diction (le matériel) "métaplasme"	1) par augmentation (pléonasme)	1° prosthèse
		2) par diminution ou retranchement.....	2° épenthèse
		3) par transpositon (métathèse)	3° paragoge
		4) par la séparation (diérèse)	1° aphérèse
5) par la réunion (contraction)		2° syncope	
2. Fig. de construction (grammatical)	1) ellipse et zeugma	3° apocope	
	2) pléonasme	1° synérèse	
	3) syllepse ou synthèse	2° crase	
	4) hyperbate	1° anastrophe	
	5) imitation	2° tmésis	
	6) attraction	3° parenthèse	
	7) archaïsme	4° synchysis	
	8) néologisme	5° anacholuton	
	*9) antiptose		
	*10) enallage		
3. Tropes (signification)	1) métaphore		
	2) allégorie		
	3) allusion		
	4) ironie		
	5) sarcasme		
	6) catachrèse		
	7) hyperbole		
	8) synecdoque	1° climax	
	9) métonymie	2° synonymie	
	10) euphémisme	3° onomatopée	
4. Ni Tropes, ni Fig. de pensées	répétition	4° paranomasie	
		5° similiter cadens	
		6° similiter desinens	
		7° isocolon	
		8° polysyndeton	

II. Fig. de pensées (ou de discours)	1. antithèse	
	2. apostrophe	
	3. prosopopée	
	4. exclamation	
	5. épiphonème (sentence courte)	1) personne 2) lieu 3) temps
	6. description	
	7. interrogation	
	8. communication	
	9. énumération ou distribution	
	10. concession	
	11. gradation (climax)	
	12. suspension	
	13. congeries	
	14. réticence	
	15. interrogation	
	16. interruption	
	17. optatio	
	18. obsécration	
	19. périphrase	
	20. hyperbole	
	21. admiration	
	22. sentences	
	etc.	

(ローマ数字、アラビア数字による番号は筆者による)

「フィギュール」について (1) (註釈)

序 論

- 1) 略号Fの説明は*Encyclopédie*, Tome I (1751), «Avertissement», p. xlvj参照。
- 2) D'Alembert, «Éloge de M. Du Marsais», *l'Encyclopédie*, T. VII, 1757, p. viij. Cf. Voltaire, «Catalogue de la plupart des écrivains français», *Le Siècle de Louis XIV* (1751), éd. de 1756, Garnier-Flammarion, 1966, T. II, p. 224. なおギュスターヴ・ギヨームのデュマルセ評価については拙論「ポール・ロワイヤルの『文法』および『論理学』における形容名詞」、山口大学哲学研究会「哲学研究」第6巻(1997)、3-6頁参照。
- 3) デュマルセの人と作品の紹介は、グランベールの『デュマルセ讃』の他に以下参照。
- Gunvor Sahlin, *César Chesneau Du Marsais et son rôle dans l'évolution de la grammaire générale*, Macon: Protat, 1928. これは伝記を語らない。
- Françoise Douay-Soublin, «Présentation» de Dumarsais, *DES TROPES ou des différents sens, FIGURE et vingt autres articles de l'Encyclopédie*, suivi de *L'ABRÉGÉ DES TROPES* de l'abbé Ducros, Flammarion, 1988, pp. 29-38 (以下この書はTDSと略記する)。
- 4) Dumarsais, *Exposition d'une méthode raisonnée pour apprendre la langue latine. Suivie de Carmen saeculare d'Horace mis en version interlinéaire* (1722, 1795, 1809, et in *Œuvres*, 1797). 我々が参照するのは *Les Véritables Principes de la grammaire et autres textes, 1729-1756*, Coll. Corpus des Œuvres de philosophie en langue française, Fayard, 1987, pp. 9-51収録のテキストである (以下この書はVPGと略記)。
- 5) Dumarsais, «Chapitre Préliminaire» des *Véritables Principes de la grammaire...* 参照はVPG, pp. 53-65収録のテキスト (*Œuvres*, 1797) による。『転義論』の注には «Préface générale» なるものも言及されている (TDS, «Notes», p. 238) が、我々はそれを同定し得ていない。
- 6) Dumarsais, *Des Tropes ou des différents sens dans lesquels on peut prendre un même mot dans une même langue*, Brocas, 1730; nouvelles éd. 1757, 1776..., 4e éd., 1787). なおこの書が、上記諸著作と同じく、著者の生前には再版をみていないことに注意しよう。
- 7) これらのリストは、TDS, pp. 310-311およびVPG, p. 7に見ることができる。
- 8) «Figure», *l'Encyclopédie*, tome VI (1756), 766b-772b. なお諸学術の用語としての «Figure» はこの前後に合計17項目を数える。参照の便宜から我々はVPG, pp. 605-626所収のテキストを使用する。なおTDSもこれを収録している (pp. 317-336)。
- 9) Cf. M. Riffaterre, *Essais de stylistique structurale*, Présentation et traduction de D. Delas, Flammarion, 1971, pp. 261-285.

- 10) Cf. R. Barthes, «Le retour du poéticien» (1972), in *Œuvres Complètes*, T. II, Seuil, 1994, pp. 1433-1435.
- 11) G. Guillaume, *Leçons de linguistique*, publiées par R. Valin, 1948-1949, Série C, Québec/Paris, 1973, pp. 107-108; N. Chomsky, *La Linguistique cartésienne* (1966), trad. fr. par N. Delanoë et D. Sperber, Seuil, 1969.
- 12) G. Genette, «La rhétorique restreinte» in *Figures III*, Seuil, 1972, pp. 21-40; Ch. Perelman, *L'empire rhétorique: rhétorique et argumentation*, «Avant-Propos» et le Chapitre I, J. Vrin, 1977; P. Ricœur, *La métaphore vive*, II^e Étude, Seuil, 1975.
- 13) T. Todorov, *Théories du symbole*, 3. «Fin de la rhétorique» (pp. 85-139), Seuil, 1977.
- 14) グランベールはこの書が評判のわりには売れなかったことを指摘している (D'Alembert, *art. cit.*, p. x).
- 15) P. Fontanier, *Manuel classique pour l'étude des tropes ou Éléments de la science du sens des mots* (改定版: 1830年). Voir *Les Figures du discours*, avec une «Introduction» par G. Genette, Flammarion, 1977, p. 6.
- 16) Todorov, *op. cit.*, p. 85. なおその前バルトが19世紀フランスにおける修辞学の死について語っている (R. Barthes, «L'Ancienne rhétorique. Aide-Mémoire» (1970), in *O. C.*, T. II, pp. 923-926).
- 17) 詳細な検討は拙論「ある批評のトポスの形成——「縮小された修辞学」について」(九州フランス文学会「フランス文学論集」、1998年掲載予定) 参照。
- 18) 先のリストに加えて、モベルテュイ、テュルゴ、コンディヤック、アダム・スミスからの抜粋とともに『言葉の原因に関する断章』その他を収めた *Varia linguistica: Textes rassemblés et annotés* par Ch. Porset, avec une Préface par M. Duchet, Ducros, 1970をあげよう。
- 19) 例えばドゥエ＝スブランの «Présentation» (TDS., pp. 7-26) および «Notes» (pp. 238-305, 361-381) がある。またより広い展望の研究として Antoine Compagnon, *La Troisième République des lettres: de Flaubert à Proust*, Seuil, 1983参照。

I

- 1) 修辞学のフィギュールについても枚挙と分類が常に重要な関心事であったことをバルト、ジュネット、トドロフらが指摘している。上掲書参照。
- 2) Cf. Rajasekhara, *La Kavyamimamsa*, trad. N. Stchoupak et L. Renou, in J. Charpier et P. Seghers, *L'Art poétique*, Seghers, 1956, pp. 49-66.
- 3) M. Foucault, *Les Mots et les Choses*, «Préface», Gallimard, 1966, p. 14.
- 4) Dumarsais, «Chapitre Préliminaire», VPG., p. 64. 他の6大部分とは「命題と総合文」「綴り字」「発音法 (prosodie)」「語源」「統辞基礎論」「統辞」である (p. 62)。また «Avertissement» des *Tropes*, TDS., pp. 57-58参照。

- 5) 『転義論』に時々現れるこの「回顧的な」記述についての説明は初版の「前書き」(TDS, p. 58) 参照。
- 6) 例えば I, 5 (第一章第5節) のタイトル「転義論は文法学に属する」。その書き出し「それに、この論著は文法学の本質的な一部分であると私には思われる。なぜかといえは語の真の意味 (signification) をわからせ、いかなる意味 (sens) でそれが言説において用いられているかを分からせることは、文法学に属するからである」(TDS, p.71)
- 7) ミシェル・フーコー『言葉と事物』、上掲書 144-145頁に負う指摘。
- 8) A. Masson, *L'Allégorie*, Coll. "Que sais-je?", P.U.F., 1974, p. 117.
- 9) フィギュールの名称につけた番号 (ここでは I-3-2) については添付の別表を参照されたい。
- 10) Cf. Diderot, art. «Encyclopédie», *Encyclopédie*, Tome V, p. 635a; «Prospectus» (1750), cité «avec (des) changemens et (des) additions» par D'Alembert, dans son «Discours Préliminaire des éditeurs» (T. I, 1751), pp. xxxviii-xxxix.
- 11) TDS, p. 59. グランペールもこのエピソードを再話している (D'Alembert, «Éloge de M. Du Marsais», *art. cit.*, p. x).
- 12) Art. «Abstraction», VPG, p. 146.
- 13) Ph. Hamon, *Introduction à l'analyse du descriptif*, Hachette, 1981, pp. 8-24. Cf. C. Simon, «Le métier du romancier», *Le Monde*, édition internationale du 17 au 23 oct. 1985.
- 14) TDS, I, 1 «Idées générales des figures», p. 64.
- 15) T. Todorov, *Théories du symbole*, *op. cit.*, p. 132.

II

- 1) «Litote» は «Hyperbole» に相対する転義として1730年の著書に位置をしめている (TDS, II, 7, p. 131)。ポーランはこれら二つを «Fig. de pensée» のうち «Fig. de passion» の一種とする。J. Paulhan, *Traité des figures ou la rhétorique décryptée* (1953), in *Œuvres Complètes*, II, Cercle du Livre Précieux, 1966, pp. 206-207. 項目 «Figure» は «Hyperbole» を転義に分類してもいる (I-3-7)。
- 2) Cf. *l'Encyclopédie*, art. «Prétérition», Tome XIII, 337b; «Prétermission», *op. cit.*, 338a.
- 3) 『百科全書』には «Oxymoron» の項目はない。
- 4) Cf. TDS, II, 18, pp. 172-179. ただしデュマルセはこれを転義ではないとする。ポーランはこれを «Fig. de langage» のうちの «Fig. de construction» に入れる (引用書、216頁)。
- 5) F. de Saussure, *Cours de linguistique générale* (1916), Payot, 1972, pp. 180-184.
- 6) 『転義論』に文彩の用例や用い方に関していくつかの観察を提供している『人さま

- ざま」には次の一節がある。「隠喩とか直喩はある真実の可感的で自然なイメージを別物から借用する。(…) 正確な精神は直喩と隠喩に自然にのめりこむ」(La Bruyère, *Les Caractères*, 1696, «Des ouvrages de l'esprit», No 55, La Guilde du Livre Lausanne, 1964, p. 103)
- 7) TDS, II, 10, p. 136. ポーランはこれを «Fig. de pensée» のうち «Fig. d'imagination» に位置づける (p. 205. cf. p. 217).
- 8) 上記引用文最後の «comparaison» の用例参照。同じことは同書の «Métaphore» の説明を開始するパラグラフにおけるこの語の使い方についても言える (TDS, p. 135).
- 9) 一例をあげる。「… 語の意味作用 (signification des mots) のみでは文章を分からせるには十分ではない。それに加えてこれらの語が当の文章において互いに有する関係の標をよく知る必要がある。これらの語が一つの意味 (sens) をなすのはこの関係によってに他ならないからである」(*Inversion*, VPG, p. 73). また本稿 I 注 6 参照。これはエミル・バンヴェニストの記号論 (sémiotique)/意味論 (sémantique) の識別を思わせる (É. Benveniste, *Problèmes de linguistique générale*, II, ch. XV, Gallimard, 1974).
- 10) ケケロ、アウグスティヌス、バスカル、ペローにおけるこれら三機能の関係の変化については拙著『「パンセ」における声』、九州大学出版会、1990年、48-61頁参照。
- 11) “Vitium orationis quando non redditur quod superioribus respondeat”. ドゥエ＝スプランによれば出典はErasmе, *De octo orationis partium constructione libellus*, avec les commentaires de J. Rabirius, Paris, 1535である。(TDS, «Notes», n. 45, p. 365)
- 12) Despautère, *Syntaxis* (1513), éd. de 1571 (TDS, «Notes», n. 52, p. 365). このオランダの学者についてはPierre Larousse, *Grand Dictionnaire Universel* (1866-1876), T. VI, p. 577a 参照。
- 13) ドゥエ＝スプランは、デュマルセにおいても規範の思想は社会的に上流の紳士淑女 (honnêtes gens) への参照に結びつくことを指摘している (TDS, «Notes», n. 3, pp. 241-242).
- 14) 『転義論』はこのトポスの源泉となったホラティウスの “Quandoque bonus dormitat Homerus” (*Art poétique*, v. 359) の俗な解釈をあげ、これに文脈での意味 (それは “Indignor” に続くこと、“quandoque” は “quandocumque” の義であること) を対比している (TDS, III, 10, p. 214). 「古代派」に相応しい指摘である。
- 15) Douay-Soublin, TDS, «Notes», n. 82 et n. 90 (p. 367).
- 16) 例えばポーランがそうするように (J. Paulhan, *op. cit.*, p. 204). もっとも彼はこれを «Interrogation» とともにむしろ論理学に属すると指摘している。デュマルセはレトリックの設ける三種類の言説の一つ “genre délibératif” (思量体) の名との混同をおそれたのであろうか。
- 17) *L'Encyclopédie*, Tome XV, 1765, art. «Soliloque», 323b-324a.

- 18) «Fig. de diction» ではなく «Fig. de vocabulaire» をたてるポーランも «Métaplasme» には言及しない (cf. *op. cit.*, pp. 213-215).